

尾台榕堂 医案⑤

竹原元兵衛、年三十余、水病を患う。脇腹鞭満、身熱して渴し、咳煩短気、小便不利、一身洪腫、微黄、之を按ずるに指を没す。越婢加苓朮附湯を用い、夜々、大承気湯一貼を与え、服すること二旬余にして、諸症失するが如し。調理すること月許りにして愈ゆるを告ぐ。

翌年の秋、会々風霜肅殺し、腫満復発す。脈沈遅、胸腹煩満し、一身又黄腫。之を按ずるに、柔軟なること泥の如し。小便利せず。因りて防己黄耆加附子湯を与え、兼ねて陷胸丸を用う。病者曰く、「去年、腫満を患う。先生の治に頼りて愈ゆ。今年再発し、以後、自ら水の胸脇漲るが如きを覚ゆ。陷胸丸を服して、嘔吐有りと雖も快下利無し。服して後、胸中潰々として、飲食する能わず、気力日に衰う。之が為に処するを請う」と。乃ち鉄砂煉を作りて之に与う。水瀉すること日に数行。服すること八、九日、諸症随いて退く。但、心胸痞満し、小便秘利せず。因りて茯苓飲を投じ、二旬許りにして全く功を収む。